

コロナ禍における外出行動のメカニズムについて

— 罪悪感と文化的自己観に着目して —

福森 大輝*・松浦 均**

Mechanism of going out behavior under the infectious diseases (COVID-19)

— Focus on sense of guilt and cultural construal of self —

Daiki Fukumori* and Hitoshi Matsuura **

要 旨

本研究は、コロナ禍での若者の外出行動について、文化的自己観、同調志向、外出時に感じる罪悪感との関係から検討したものである。大学生 160 名を対象に 2021 年 8 月 1 日から同年 9 月 30 日までの期間でどこかに遊びに行ったり旅行に行った回数及び場所、そこに行く際に感じた罪悪感の程度、コロナ不安、コロナに対する意識、文化的自己観と同調志向を尋ねた。分析の結果、「感染不安」と「外出不安」、「相互独立的自己観」において性差が見られた。また、「日常生活不安」と「部活・サークル不安」から外出に対する罪悪感に影響が見られ、「外出不安」と「部活・サークル不安」から外出回数への影響が見られた。他者との関係性を重要視する人は、コロナに感染する不安よりも「周りの人がどう思っているのか分からない」という他者評価を気にして罪悪感を喚起していることが推測された。一方、規範やルールを重要視する人は、コロナへの態度や感染防止意識の高さが不安の高さに繋がっており、喚起される罪悪感も自身の不安の大きさに影響を受けていた。部活動やサークル活動参加者は、それに充てていた時間が空白になり、その時間の穴埋めや集団とのつながりや会員同士の関係性を保つため、不安や罪悪感を抱えながらも外出を行っていることが示唆された。

キーワード：コロナ禍、コロナ不安、外出行動、罪悪感、文化的自己観

問題と目的

1. はじめに

2019 年 12 月に中国で初めて確認され、その後、世界各地に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症は現在も収束を見ない。この間、世界の累計感染者数は 2022 年 4 月に 5 億人、死者は 600 万人を超えた。国内では、2020 年 1 月に初めて感染者が確認されて以来感染者が増え始め、同年 4 月に政府は 7 都道府県に対して初めて緊急事態宣言を発出、その後、全国に拡大した。その後は、数度の緊急事態宣言やまん延防止措置等重点措置などの行政的対応を経て現在に至っている。2021 年 2 月からはワクチン接種も始まり、2022 年には 3 回目の接種が進められている。そういう状況にあつて、現在もマスクの着用や手指の消毒など人々は日々感染拡大防止に努めている。

ところで、全国の大学は 2020 年 4 月以降、学生に対して自宅待機や移動制限を行ってきた。2021 年度になって対面授業を実施している大学は多いと思われるが、

ほとんどの大学で感染拡大防止対策はそのまま継続されているはずである。そんな中、2020 年は、緊急事態宣言下で若者が不用意に外出することが感染拡大の要因となっているとマスメディア等で報道された。具体的な論調としては、度重なる緊急事態宣言及びまん延防止措置のなかでの長期間の自粛を強いられ、その結果「自粛疲れ」や「自粛慣れ」といった状態に陥り、コロナウイルスの感染や緊急事態宣言に危機感をあまり感じなくなっている、若者はコロナウイルスに感染しても高齢者に比べて症状が軽い、あるいは無症状の場合が多いということで外出してしまう、飲食店でお酒を飲むことができない代わりに公園や広場に集まって「路上飲み」をしているといったことが批判的に報道された。さらに、緊急事態宣言地域やまん延防止措置適応地域に在住者が、他県に外出していることが問題として取り上げられた。

しかしながら、すべての学生や若者がこのような行動を取っているわけではない。「Do Our Bit 学生プロジ

*名張市立梅ヶ丘小学校

**三重大学教育学部

エクト」(2020)によるインターネット上の調査では、大学生の危機意識は、2020年1月から4月にかけてむしろ向上が見られる。発症時の対応について「説明できる」と回答した人は当初10%であったが、4月には70%に増加し、予防行動については手洗い(98%)、マスク(94%)、うがい(81%)であり、三密を避ける行動を実施している割合は90%と高かった。自粛期間中に「外出していない」(40%)という回答も多く、自宅待機を順守している学生も存在している実態が明らかになった。若者がコロナに対してそれなりに対応していたわけである。若者のコロナウイルス関連の主な情報の獲得経路は、ニュース、Twitter、LINE等で、SNSも駆使しながら、感染症に対する情報を収集し感染対策を講じていると考えられる。果たして若者は、コロナ状況下でどのように過ごしているのだろうか。

2. コロナ不安について

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、従来の大学生活を一変させられた現在では、大学不適應の傾向が見られる大学生が多くいることが文科省(2020)の調査で明らかになった。それによると、コロナの影響を受けて2020年12月までに大学・大学院を退学あるいは休学した学生が少なくとも約5000名いることが確認されている。国及び県や市町村から通告される各種制限・自粛等によって生じるメンタルヘルスの悪化や経済的困窮等が原因となっており、従来見られなかった新たな不安を抱えて生活していることが考えられる。これに関わって藤井(2021)は、大学1年生から3年生を対象に調査を行い、大学生版COVID-19感染拡大不安尺度を作成した。「自粛不安」「感染不安」「大学生生活不安」「経済的不安」「部活不安」「予期不安」の6つの下位尺度のうち「経済的不安」が最も項目得点平均値が高く、次に「自粛生活不安」「感染不安」を強く感じていることが明らかになり、大学生においてはコロナ感染自体より、それによるアルバイト等の収入が減少し、満足に生活が送れなくなることや学業継続、進路選択に影響が生じることを強く不安に思っていることが考えられる。

3. 文化的自己観について

文化的自己観とは、Markus & Kitayama(1991)が提唱した概念で、ある文化において歴史的に作りだされ、暗黙のうちに共有されている人の主体の性質についての概念(北山, 1998)である。文化的自己観は「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」に分類され、前者は「自己は周囲の人間と本質的に切り離された主体である」という認識を持ち、行動は主体から外界に働きかけるものであり、自己に内在する様々な特性によって定義される」と考えられ、西欧特に北アメリカ中産階級に典型的な考え方である。一方後者は「自己は

周囲の重要な他者とつながっているという認識を持ち、行動は周囲の人間や状況に依存し、人間は集団に成員として調和を保つように動機づけられている」(一言・松見, 2004)と考えられており、日本を含むアジアの文化で前提とされるものである。日本人の自己の特性の多くは、相互協調的自己観の反映として理解される。例えば、甘え(土居, 1969)、日本的自我(南, 1983)、間人主義(浜口, 1982)の概念に共通する自己認識の特性は、他者との親和、他者評価への懸念、個人の自立の低さ等が該当する。文化圏によって自己観が固定化されているように考えられがちであるが、西欧・アジアそれぞれの文化の中でも、非典型的な自己観が優位な下位文化や個人が存在することが示唆されている(Markus & Kitayama, 1991)。また相互独立-相互協調的自己観の区分は異なる文化を持つ集団同士で行われる比較文化的視点であるのみならず、ある特定の文化内で行われる文化内比較に対しても有効なモデルとなり得ることがMarkus & Warf(1987)の研究から推測されている。

本研究は、比較文化視点と文化内比較の2つのアプローチのうち、後者の視点に立つものである。この文化内比較では、人は相互独立的自己観と相互協調的自己観の両面を持っており、2つの自己観の相対的優位性によって個人の自己観が規定されるという考え方を基盤としている(高田, 2011)。青年期においては成人期と比べて相互独立性が低下する一方で、相互協調性は極大を迎えることが分かっている(高田, 1999)。これら2つの自己観の個人差を測定する尺度も作成されており、相互独立的自己観が優勢の者は、自尊感情や肯定的自己認識が高いのに対して、相互協調的自己観が優勢の者は、自尊感情が低く心理的ストレスや批判的自己認識が高いことが示されている。また、他者からの期待に添うための自己点検を怠らないために、他者の視線を敏感に感じ取り、自己批判的になりやすい(高田, 2012)と考えられている。

新型コロナウイルス感染対策は国によってその政策や方針は異なっており、どのような対策が最善であるのかは未だ不明で、いずれの国も試行錯誤しているように思われる。人々は基本的には国の政策に従っているわけであるが、感染予防の行動やコロナ状況下で外出するといったことに対する根本的な考え方が、その国の文化の影響を受けていると考えられる。すなわちどちらの自己観が優位であるかによって、その人の行動がどのように決定づけられるのか考えてみる。

具体的には、相互独立的自己観が優位な人は、周囲の人や社会ではなく自身の定めた基準や考え方に沿って行動を起こすことが考えられ、「自分は感染しない」あるいは「感染しても軽症で済む」と考えている人は感染予防行動をあまり行わず、コロナ禍以前とそれほ

ど変わらずに外出すると考えられる。一方、相互協調的自己観が優位な人は、周囲の人や社会との関わりを保つことを大切に考えるので、たとえ自身がコロナに対してあまり不安や恐怖を感じていなくても外出することを憚り、他者から白い目で見られないよう努めることが考えられる。いわば同調圧力とも言えよう。

4. 同調志向について

Asch (1955) を始めとする多くの同調行動の研究から、人は、明らかに誤った判断でも、それが多数派によって示されていれば同調してしまう(同調の圧力)ことが明らかになっている。さらにそのことが権威に対する無抵抗な服従や集団浅慮などの社会問題につながることを示されている。同調 (conformity) とは、ある個人が、集団や他者の設定する標準ないし期待に沿って行動することと定義されるが、特に、集団状況で他の成員が一致して自分とは異なる意見を主張するとき生じやすい (Asch, 1955)。また Deutsch & Gerard (1955) は、同調には多数派から受け入れられたいという“規範的影響”による同調と、他者からより正確な情報を得ようとする“情報的影響”による同調が存在するとしており、前者は自身の判断に確信が持てなかったり他者からの圧力を感じたりする状況で生じやすく、後者は自分の判断や行動が正しいかどうかを直接確かめることができない場合に判断の拠り所として他者の意見や行動を参照し、結果として同調が起きるということである。横田・中西 (2010) は規範的影響と情報的影響を弁別した日本語版同調志向尺度を作成し調査を行った。その結果、規範的影響と情報的影響の間に弱い正の相関が見られ 2 つの因子が完全に独立していない事を示した。これは、規範に従うように同調する人の中には、他者の情報を参考にしやすい傾向を持っている人がいることを意味している。

ところで、コロナ禍での行動制限や感染防止対策の実施は、法律的な拘束力はなくともマナーとして社会に完全に浸透し、多くの人がマスクの着用や手指の消毒を行っている。同調行動の観点から考えると、自分は特段の感染対策をしなくても大丈夫であると心の中で思っている、周囲の人が対策を行っている中で、自分は感染対策行動を取らないと冷ややかな目で見られてしまうことを避けるために感染対策を行っている人がいることが考えられる。反対に、自分の周囲の人が感染対策行動を全く行わないで外出や旅行などを行っている場合に、その方向での同調行動をとる人もそれなりにいると考えられる。

5. 罪悪感について

罪悪感とは、後悔、良心の呵責、“悪いことをしてしまった”ことへの失望を意味する自己意識的情動である (Tangney, Wagner, & Gramzow, 1992)。さらに、実際に

規範に背かずとも、それを欲する意識だけで喚起されるとする見方もある (横田, 1999)。罪悪感とは、社会的行動を抑制し、謝罪や補償行為を生じさせ、規範準拠機能および個人と対人間に役立つ機能を持つ。一方で、抑うつ、不安、対人不安、社会的活動障がいと負の相関を持ち、苦痛を伴う情動反応でもある。それゆえ苦痛を回避するために罪悪感を喚起するような行為は抑制されると考えられる (有光, 2021)。

また、罪悪感の元になる「悪さ」には、刑法罰にあたる犯罪行為から、友人との付き合いにおけるマナーのような個人的な規範の逸脱ということまで、法的な意味での「悪さ」自体にかなり幅があり、罪悪感にも幅があると考えられる。本研究ではコロナ禍での外出行動についての罪悪感について検討を行うため、犯罪行為のような法的規範逸脱の際に生じる罪悪感ではなく、公共の空間における迷惑行為などが該当する公衆道徳違反行為、他者へ負い目を感じる行為や利己的な行為である個人的規範逸脱行為に生じる罪悪感について検討する。また、罪悪感の抱きやすさには年齢による差があり、10~20代の若者では、個人的規範逸脱行為に対する罪悪感が犯罪行為に対する罪悪感よりも大きいことが分かっている (藤吉・田中, 2006)。これは、10~20代では法律違反や刑罰を受けることよりも、自己の行いが自身の基準と適合するのかどうかで喚起される罪悪感の大きさに違いがあり、“個”を重視する価値観が伺える。同一の行為であってもそれに伴う罪悪感を全く喚起しない人と、喚起しやすい人がいると考えられるということである。

6. 本研究の目的

コロナ禍において10~20代の若者や大学生は、メディアで報道されているような感染拡大防止の意識が低い者ばかりでなく、学校からの通達やSNS等を駆使して情報を獲得し、新型コロナウイルス感染拡大防止に努めている者もいることが推測される。若者の中には不要不急と言われても外出をするグループと、感染や対人関係などの影響を受けて外出に対して抵抗を感じ外出を控えているグループの2つに分けることができると思われる。本研究は、2つのグループ間にどのような違いがあるのかを明らかにするため、新型コロナウイルス対策の実施の程度や、どのくらい不安に感じているかを測定し、外出行動をする人とならない人の外出時に感じる罪悪感の違いについて、その個人の文化的自己観及び同調志向の観点から検討する。検討するにあたり「相互独立的自己観」「相互独立的自己観」「コロナ意識」「コロナ不安」「同調志向」「罪悪感」「外出回数」の各変数間の関係について、罪悪感・外出行動モデル図を作成した (Figure1)。また本研究における仮説は次の通りである。

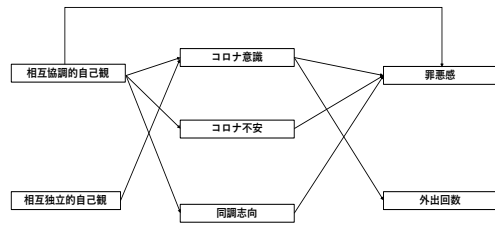


Figure1 罪悪感・外出行動モデル

仮説 1：相互協調的自己観が高い人は、所属集団との関係維持のために外出行動を起こし、罪悪感を喚起しやすい。

仮説 2：相互協調的自己観が高い人は、コロナ不安や同調志向が高く、外出行動に対して罪悪感を喚起しやすい。

仮説 3：相互協調的自己観、相互独立的自己観の高低に関わらず、新型コロナウイルスへの関心や感染予防に関する意識が高い人ほど外出回数が少ない。

仮説 4：女性は男性に比べてコロナ不安が高く、外出行動に伴う罪悪感が大きい。

方法

調査対象 160 名を対象にインターネット調査を実施した。回答に不備があった者を除き、有効回答者として計 145 名(男 65 名, 女 80 名, 平均年齢; 19.50 歳)を分析対象とした。

実施時期 2021 年 10 月中旬から 11 月中旬

手続き インターネット上の web 調査を行った。

質問紙の構成 質問紙は、「コロナ禍での行動に関するアンケート」と称し新型コロナウイルス感染対策に関する意識、新型コロナウイルス感染拡大に対する不安、夏季休業期間での外出先とそれに伴う罪悪感および文化的自己観、同調志向によって構成された。調査に協力することへ同意した人のみ URL をクリックし、性別・学年・所属学部を尋ねた。具体的な内容は次の通りである。

①**コロナに関する意識** コロナ禍について日頃どのような意識を持っているのか、感染対策として実施していることなどについて尋ねた。質問内容は内閣官房が 2021 年 6 月にインターネット上で、全国の男女 18 歳～34 歳を対象に行った新型コロナウイルス対策に関する意識調査(内閣官房, 2021)を基に計 19 項目作成した。質問については 4 段階で測定した。

②**コロナ不安** コロナ禍における不安について尋ねた。藤井(2021)の「新型コロナウイルス感染が大学生に及ぼす心理的影響-COVID-19 感染拡大不安尺度開発に向けた予備的検討-」での『大学生版 COVID-19 感染拡大不安尺度』を基に計 22 項目作成した。「自粛生活不安」「感染不安」「大学生生活不安」「経済的不安」「部活不安」「予期不安」の 6 つの下位尺度に加えて、今回は「自身がコロナに感染すること」「再び感染拡大すること」の 2 項目を追加した。いずれも「とても不安」から「全く不安でない」の 4 段階で回答を求めた。

③**文化的自己観** 高田・大本・清家(1995)の「相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成」を基に計 16 項目で作成した。「評価懸念」「独断性」「この認識」「他者への親和・順応」の 4 つの下位尺度それぞれ 5 段階で測定した。

④**同調志向** 横田・中西(2010)の「同調志向尺度の作成」を基に計 15 項目で作成した。「規範的影響因子」「情報的影響因子」の 2 つの下位尺度それぞれで 5 段階で測定した。

⑤**外出行動と罪悪感** 2021 年 8 月 1 日～9 月 30 日までの期間に遊びに出かけたり、旅行した回数と場所を尋ねた。加えて、回答した場所に行った際、「うしろめたい気持ち」や「申し訳ない気持ち」、「負い目」といったものをどの程度感じたのか「とても感じた」から「全く感じなかった」の 4 段階で測定した。

結果と考察

各変数について合成得点にしたものの平均値と標準偏差について、全体および性別、学年毎の数値を Table1 に示した。

1. 各尺度の因子分析および信頼性分析

①**コロナ不安** 新型コロナウイルスに対する不安 21 項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、負荷量.40 以下の項目 2 項目を分析から除外し、再度、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。4 因子が抽出され、回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table2 に示した。第 1 因子は 5 項目で構成されており、「人と会う機会が減っていること」「思うように日常生活が送れないこと」など、日々の生活の中で行われる人とのコミュニケーションを意識した内容の項目が高い負荷量を示しており、『日常生活コミュニケーション不安』と命名した。

コロナ禍における外出行動のメカニズムについて

Table1 各変数の平均値、標準偏差

	全体(n=145)		男性(N=65)		女性 (n=80)		1年生(n=96)		2年生(n=18)		3年生(n=6)		4年生(n=25)		F値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
コロナ意識	58.697	5.960	58.908	5.893	58.525	6.008	58.937	5.769	57.330	6.670	61.830	4.100	58.000	6.255	1.019
コロナ不安															
日常生活不安	3.040	0.910	2.935	0.741	3.123	0.712	3.168	0.680	2.970	0.860	2.870	0.560	2.630	0.708	3.918 **
感染不安	3.420	0.730	3.336	0.524	3.501	0.387	3.463	0.462	3.450	0.470	3.170	0.340	3.330	0.448	1.204
外出不安	2.870	0.790	2.751	0.565	2.975	0.543	2.920	0.573	2.720	0.570	2.530	0.440	2.880	0.509	1.372
部活不安	2.570	1.090	2.615	1.073	2.538	1.072	2.700	1.027	2.580	1.030	2.580	1.170	2.060	1.116	2.386 †
文化的自己観															
相互独立的自己観	3.380	1.000	3.596	0.738	3.111	0.694	3.274	0.770	3.280	0.590	3.730	0.790	3.500	0.740	1.177
相互協調的自己観	3.800	1.000	3.717	0.740	3.890	0.727	3.796	0.769	3.890	0.620	3.600	1.110	3.860	0.564	0.267
同調志向															
規範的影響	4.000	1.000	3.594	0.949	3.775	0.837	3.768	0.906	3.720	0.840	3.630	0.390	3.380	0.906	1.284
情報の影響	3.800	1.000	3.711	0.787	3.908	0.643	3.912	0.655	3.830	0.700	3.070	0.900	3.630	0.779	3.414 *
外出回数	4.710	5.225	4.538	4.023	4.850	6.023	3.958	3.699	7.890	8.480	8.830	9.940	4.200	4.090	4.450 **
罪悪感	2.545	0.932	2.400	0.941	2.663	0.908	2.621	0.942	2.670	0.750	1.830	0.900	2.320	0.926	1.980

*p<.05 **p<.01

Table2 コロナ不安尺度の各項目得点

	M	SD	因子			
			F1	F2	F3	F4
日常生活コミュニケーション不安 (α=.870)						
A13. 友達とのコミュニケーションが取れないこと	2.950	0.890	0.939	-0.170	0.057	0.055
A14. 人間関係が希薄になること	2.990	0.950	0.910	-0.075	-0.117	0.047
A10. 人と会う機会が減っていること	2.930	0.990	0.702	0.157	-0.050	-0.028
A12. 大学生活の先が見通せないこと	3.130	0.920	0.486	0.227	0.051	0.086
A2. 思うように日常生活が送れないこと	3.190	0.800	0.443	0.376	0.063	-0.052
感染不安 (α=.807)						
A22. 再び感染拡大すること	3.570	0.660	0.017	0.812	-0.023	0.026
A21. コロナ禍で別の大きな災害が起きること	3.470	0.780	-0.103	0.725	-0.001	0.003
A19. 自身がコロナに感染すること	3.610	0.660	-0.107	0.650	0.111	0.052
A9. 家族がコロナに感染すること	3.460	0.780	0.019	0.613	0.037	-0.080
A20. 自身が感染した際に、その情報が拡散すること	3.830	0.370	0.257	0.559	-0.008	-0.188
A3. 自由に好きな場所に行けないこと	3.340	0.780	0.311	0.425	-0.001	0.038
A18. コロナによる差別が発生・拡散すること	3.150	0.850	-0.038	0.411	0.149	0.241
A15. 収入や生活費が減ること	2.960	0.990	0.060	0.408	-0.220	0.050
外出不安 (α=.774)						
A6. 公共交通機関を利用する事	2.630	0.820	0.132	-0.272	0.834	-0.029
A8. 外出すること	2.480	0.830	0.005	0.000	0.690	0.014
A1. 旅行すること	2.990	0.790	-0.093	0.148	0.621	0.023
A5. 人の多い所に行くこと	3.390	0.670	-0.203	0.201	0.588	0.006
A11. 友達と今まで通り遊ぶこと	2.880	0.850	0.372	0.006	0.409	-0.059
部活・サークル不安 (α=.967)						
A17. 部活やサークルのイベントの再開が見通せないこと	2.570	1.090	0.016	0.013	-0.012	0.990
A16. 部活やサークルが活動制限されること	2.570	1.090	0.072	-0.018	0.004	0.913
※削除した項目						
4. 海外に行くこと			因子相関行列			
7. 体調を崩してしまうこと			F1	0.492	0.276	0.412
			F2		0.577	0.356
			F3			0.133

Table3 文化的自己観尺度の各項目得点(N=145)

	M	SD	因子	
			F1	F2
相互独立的自己観(α=.863)				
b11. いつも自信をもって発言・行動している	3.090	1.107	0.787	-0.122
b9. 考え・行動が他者と違っても気にならない	3.145	1.226	0.705	-0.239
b6. 自分で考えぬいたモノが最良の判断である	3.110	1.077	0.687	0.162
b10. 自分の意見はいつもはっきり言う	3.241	1.091	0.683	-0.165
b5. 自分の信じてるところを守り通す	3.710	0.961	0.680	-0.077
b8. 物事を決断するときには人に頼らない	2.924	1.090	0.607	-0.036
b7. 善悪の判断は自分の考えで決める	3.593	1.007	0.593	0.177
b12. 常に自分の意見を持つようにしている	3.793	0.982	0.579	-0.008
相互協調的自己観(α=.770)				
b1. 他者の視線が気になる	3.883	1.099	-0.084	0.867
b2. 他者から受ける評価を気にする	3.917	1.092	-0.106	0.862
b3. 何かをするときに他者からの視線を感じ、迷いや躊躇いが生まれて実行に移せない時がある	3.793	1.156	-0.196	0.738
b13. 仲間の中で輪を維持することは大切だ	4.166	0.814	0.120	0.340
b14. 仲間との意見の対立は避けるべきだ	3.303	1.033	-0.013	0.319
※削除した項目				
b4. 他者が自分の考えを何と思おうと気にしない				
b16. 相手や状況に応じて態度や行動を変える				
b15. 意見が対立したときは相手の意見を受け入れる				

第2因子は8項目で構成されており、「再び感染拡大すること」「自身がコロナに感染すること」など新型コロナウイルスに感染すること、収束しつつある今の状況から再び感染拡大し、行動に制限が加わることに對する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで『感染不安』因子と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「公共交通機関を利用すること」「外出すること」など自身が外出して何かすることや外出すること自体に対する内容の項目に高い負荷量を示されていた。そこで『外出不安』と命名した。

第4因子は、「部活やサークルのイベント再開が見通せないこと」「部活やサークルの活動制限されること」の2項目で構成されており、所属する部活動や、サークル活動がコロナ禍以前のように機能することやコロナ禍で受けた制限を再び受けないかといった内容であった。そこで『部活・サークル不安』と命名した。

藤井(2021)の尺度では「自粛生活不安」「感染不安」「大学生活不安」「経済的不安」「部活不安」「予期不安」の6因子構造に分類されており、今回の本研究における因子構成とは異なった。また下位尺度間の得点比較では「経済的不安」の値が最も大きく、大学生はコロナ禍での営業短縮や営業停止によるアルバイト等の時間が減少し、収入が不安定になることに強く不安を感じていることが明らかになっているが、本研究は先行研究が調査を行った時期と異なり、新型コロナウイルスのワクチン接種が進み、徐々に制限が解除されつつある状況になりアルバイト等も再開されてきたことで、経済的な不安が小さくなったことが考えられる。また、

追加した項目の「自身がコロナに感染すること」「再び感染拡大すること」は「感染不安」に分類された。

②文化的自己観 最尤法・バリマックス回転による因子分析を行った。負荷量.30以下の項目3つを分析から除外し、再度最尤法・バリマックス回転による因子分析を行い2因子が抽出された。Table4に示した。

第1因子は8項目で構成されており、「いつも自信をもって発言・行動している」「考え・行動が他者と違って気持ちにならない」など自身の考えたことや判断、行動に対する内容に高い負荷量を示しており『相互独立的自己観』因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「他者の視線が気になる」「仲間の中で輪を維持することは大切だ」など他者や集団との関りに関する内容に高い負荷量を示しており『相互協調的自己観』と命名した。高田・大木・清家(1995)の因子分析では「評価懸念」「独断性」「個の認識・主張」「他者への親和・順応」の4因子に分類され、今回の因子構成とは異なった。しかし「独断性」と「個の認識・主張」との間には低～中程度の正の相関、「評価懸念」と「他者への親和・順応」との間には中程度の正の相関が見られ、2つの概念は完全に独立したものではなく、本研究においてはそれら2つの概念が同様に捉えられた結果として、2因子構造になったと考えられる。

③同調志向 最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量.40以下の5項目を分析から除外し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、2因子が抽出された。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable4に示した。

Table4 同調志向尺度の各項目得点と因子分析結果 (N=145)

	M	SD	因子	
			F1	F2
規範的影響($\alpha=.886$)				
c3. たとえ納得できなくても、仕方なく周りに合わせてしまう事が多い	3.531	1.057	0.917	-0.125
c2. 周囲の反応が気になって、本心と違う事でも周りに人に合わせて同意してしまう事が良くある	3.614	1.121	0.884	-0.051
c1. 自分の主張を押し通して輪を乱すくらいなら、何も言わない方が気が楽である	3.821	1.093	0.772	-0.073
c5. 場を乱さないように、いろいろと人に合わせてしまう事が多い	3.738	1.004	0.695	0.158
c4. 何か決断するときに、自分だけ意見が違うと気まずい	3.766	1.157	0.452	0.389
情報的影響($\alpha=.813$)				
c13. しばしば、自分の判断の正しさに確信が持たなくなり、周囲の意見を参考にすることがある	3.924	0.947	-0.125	0.830
c14. すぐに重要な決定をしなければいけない時、自分の判断の正しさを確認するために他人の行動や意見を参考にする	3.869	0.904	-0.156	0.729
c8. 自分の考えよりも、他者の判断の方が気になってしまう	3.366	1.167	0.117	0.595
c7. 自分の意見が他者と一致すると、安心する	4.159	0.900	0.135	0.569
c15. 私はグループの基準に従いがちである	3.779	0.906	0.313	0.517
※削除した項目				
c6. みんなの中で中々自分を出せないと思うことがある			因子間相関行列	
c9. 私は、たとえ自分が賛成できなくてもグループでの決定なら従う			因子	1 2
c11. 自分の好きな服でなくても、その服が流行なら買ってしまふ			1	0.675
c12. 外食に行くときには、情報誌や口コミなどの評価を参考にする				
c10. 授業を履修する際には、その授業の内容などの情報を他の人から得て決める				

第1因子は5項目で構成されており、「たとえ納得できなくても、仕方なく周りに合わせてしまうことが多い」「周囲の反応が気になって、本心と違う事でも周りの人に合わせてしまうことが良くある」などの項目が見られ、横田・中西(2010)の先行研究の因子分析の因子構造と同様であると判断し『規範的影響』因子と命名した。第2因子も5項目で構成されており、これも先行研究と同様の因子構造であったため『情報的影響』因子と命名した。

先行研究では2つの因子の間に弱い正の相関が見られ、本研究でも2つの因子には正の相関が見られ、規範に従うよう同調しやすい人の中には、他者の情報を自身の言動の根拠にしやすい人がいることが示された。しかし、Mascarenhas & Higby (1993)によると情報的影響は、情報提供者が自身にとって重要な他者かどうかによって影響力が異なると述べており、回答者が情報提供者をメディアのような“規範”を示す存在を思い浮かべている場合は、規範的影響と捉えることができる(横田・中西, 2010)。今回の調査では同調に関する質問はコロナ意識やコロナ不安の後に回答しているため、回答者が「他者」という言葉を特定の相手ではなく“規範”を示す一般他者として捉えているため、2つの因子間で正の相関が見られた可能性がある。

3. 罪悪感と外出回数に及ぼす各変数の影響について

各変数と外出回数および罪悪感との間の関連について相関係数を算出し、結果をTable5に示した。さらに

各変数間の相関係数を算出し、結果をTable6に示した。

次に、コロナ意識、コロナ不安、文化的自己観、同調志向がそれぞれどのように罪悪感、外出回数に影響を及ぼしているのかを検証するために強制投入法を用いて重回帰分析を行った。

まず文化的自己観の各下位尺度の合成得点を説明変数、コロナ意識、同調志向の各下位尺度の合成得点を目的変数として重回帰分析を行った。その後、上記5つを独立変数、コロナ不安の各下位尺度の目的変数として重回帰分析を行い、最後にコロナ不安の各下位尺度も説明変数に入れて罪悪感、外出回数を目的変数にして重回帰分析を行った(Table7, Table8, Table9, Figure2)。その結果、「罪悪感」には日常生活不安($\beta=.297, p<0.001$)、部活・サークル不安($\beta=.222, p<0.01$)から有意な正の影響が見られた。「外出回数」には外出不安($\beta=-.315, p<0.001$)から有意な負の影響が見られ、部活・サークル不安($\beta=.202, p<0.01$)から有意な正の影響が見られた。

これらの結果については次のように考えられる。相互協調的自己観が高い人は、感染拡大によって自身が所属する集団とのつながりが希薄になり、これまで気づき上げた関係が崩れてしまう事に対し日常的に不安を感じており、さらにメディアやSNSから新型コロナウイルス感染症や変異株について情報、コロナハラスメント等のコロナに関する情報からも不安を感じているため、自身が外出した際にはそれらの不安から罪悪感を感じやすいと考えられる。

Table5 学年ごとの各変数との相関係数

	全体(n=145)		1年生(n=96)		2年生(n=18)		3年生(n=6)		4年生(n=25)	
	外出回数	罪悪感	外出回数	罪悪感	外出回数	罪悪感	外出回数	罪悪感	外出回数	罪悪感
コロナ意識	-0.213 *	0.098	-0.128	0.207 *	-0.188	0.500 *	-0.138	0.216	-0.074	0.366
日常生活不安	0.073	0.459 **	0.001	0.970 **	0.087	0.707 **	0.593	0.620	0.290	0.564 **
コロナ不安										
感染不安	-0.097	0.333 **	-0.059	0.316 **	-0.213	0.624 **	-0.278	0.453	0.06	0.374
外出不安	-0.335 **	0.272 **	-0.386 **	0.301 **	-0.487 *	0.517 *	-0.344	0.311	0.107	0.297
部活不安	.171*	0.367 **	0.05	0.677 **	0.497 *	0.255	0.001	0.702	0.378	0.413 *
文化的自己観										
相互独立的自己観	-0.08	-0.118	-0.171	-0.015	0.386	0.146	-0.635	-0.107	-0.157	0.106
相互協調的自己観	-0.068	0.213 **	-0.034	0.240 *	-0.398	0.586 **	0.300	0.548	-0.199	0.143
同調志向										
規範的影響	-0.066	0.211 *	-0.006	0.197	-0.441	0.621 **	0.414	0.384	0.04	0.198
情報的影響	-0.166 *	0.241 **	-0.034	0.297 **	-0.295	0.646 **	0.109	0.599	-0.443 *	-0.096

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table6 変数間の相関係数 (N=145)

	コロナ不安	コロナ意識	相互独立的自己観	相互協調的自己観	同調志向	外出回数	罪悪感
コロナ不安	—	0.411 **	0.046	0.350 **	0.290 **	0.002	0.479 **
コロナ意識		—	0.245 **	0.385 **	0.201 *	-0.213 *	0.162 *
相互独立的自己観			—	-0.230 **	-0.348 **	-0.080	-0.160
相互協調的自己観				—	0.641 **	-0.068	0.181 *
同調志向					—	-0.123	0.216 **
外出回数						—	0.136

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table7 罪悪感・外出回数に対する重回帰分析（強制投入法）

従属変数	重回帰分析	
	罪悪感	外出回数
	標準化係数β	標準化係数β
相互協調的自己観	-0.056	0.032
相互独立的自己観	-0.141	-0.018
コロナ意識	-0.08	-0.118
規範的影響	0.018	0.107
情報的影響	0.068	-0.017
日常生活不安	0.297 ***	0.151
感染不安	0.061	-0.029
外出不安	0.155	-0.315 ***
部活・サークル不安	0.222 **	0.202 **
R ²	0.292 ***	0.189 ***

従属変数：罪悪感 ***p<.001, **p<.01

Table8 罪悪感を説明する因子

	偏回帰係数	標準誤差	標準化係数(β)	t	p
日常生活不安	0.691	0.286	0.368	4.531	0
部活・サークル不安	0.175	0.071	0.2	2.465	0.015

重回帰分析（強制投入法） R²=0.243*** F=23.090 ***p<.001, **p<.01

Table9 外出回数を説明する因子

	偏回帰係数	標準誤差	標準化係数(β)	t	p
外出不安	-3.125	0.687	-0.353	-4.548	0
部活・サークル不安	1.052	0.375	0.217	2.804	0.006

重回帰分析（強制投入法） R²=0.151*** F=12.761 ***p<.001, **p<.01

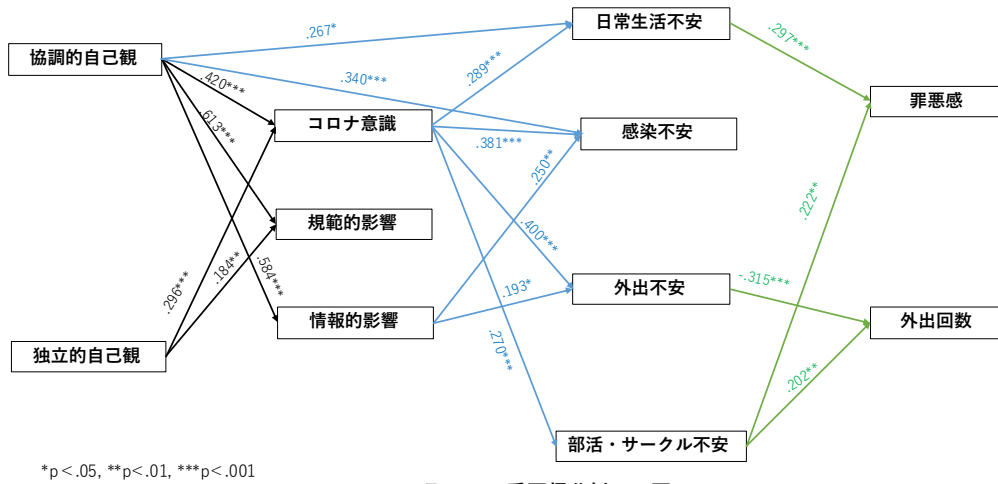


Figure2 重回帰分析パス図

外出によって感じる罪悪感の矛先は、2つに分かれると考えられ、1つは自身が所属する集団、2つ目は社会全体に対するものと考えられる。所属する集団に対しては、集団の他の構成員がコロナに対して強い不安を抱いている場合や感染対策に力を入れていることを知っている場合には、自身の行動が集団内から逸脱していることや、自分が他の成員に感染のリスクを高めていることに対して罪悪感を感じると考えられる。また、このような人は自身が外出していない場合でも内集団員が外出している時には罪悪感を喚起しやすいと考えられる。社会全体に対しては、たとえ特定の所属集団を意識せずとも、一般他者や社会全体で行われている、感染防止の取り組みや不急不要な外出は避けて自粛に努めなければならないという認識から自身の行為が逸脱していることに不安や罪悪感を感じていると考えられる。よって仮説1は一部支持されたと言える。

部活・サークル不安から罪悪感への正の影響は、自身が部活や・サークルなどの特定の集団に属していたり、所属している集団が自身の中で高い位置づけにあ

るほど、もし感染することで他の成員に迷惑がかかることや、他の成員が自粛しているのに自分だけが外出している事を気にしたり、その集団に今まで通り所属できなくなることから罪悪感を感じやすくなると考えられる。部活・サークル不安へは、コロナ意識から正の影響があり、コロナウイルスの感染防止対策を実施していたり、自身が感染する可能性を十分に理解している人ほど不安が高まると考えられる。また1・2年生は、自身がコロナに感染した際に所属集団内の上級生にも迷惑をかけてしまうこと、3・4年生は役職や責任のある立場にある人ほど自身が感染した際に集団に及ぼす影響を考え、罪悪感を感じやすくなると考える。

白石・樋口・蔵永 (2012) によると、自分自身の行為でなくても感じる罪悪感を「集合罪悪感」といい、内集団成員による外集団に損害を与える行為について、自分が直接その行為に関わってなくても自責の念や申し訳なさを感じ、外集団に損害を与えた行為に内集団の責任があると認めるとき、集団成員が経験する苦痛・嫌悪感の感情である。自身が所属する集団部活・

サークルメンバー、バイトの同僚、同じ大学といった様々な集団がある大学生が自身だけでなく、内集団成員が外出することに対して集合罪悪感を抱くことが考えられる。また、その集団への所属意識や社会的アイデンティティを強く感じるほど集団の行為について自分の責任を感じ、さらに自分の責任を強く感じるほど集合罪悪感を強く感じる事が分かっている。本研究では、自身の外出先について感じる罪悪感を尋ねたが、集団アイデンティティを強く感じる人は内集団成員の行動によっても罪悪感が喚起される可能性があり、部活・サークル不安が高い人の中にはそのような人がいたことが考えられる。こちらも仮説1を一部支持する結果となった。

次に、外出回数を目的変数にした重回帰分析の結果では、外出不安から負の影響が、部活・サークル不安から正の影響が見られた (Figure2)。コロナウイルスに感染することや、濃厚接触者となることのリスクを回避しようとする人は、極力外出を減らしていることが明らかになった。また、外出不安へコロナ対策や自身が感染する可能性を感じている人は、コロナを自身とは縁のないものだと捉えず、危険性や感染した際に重症化することを身近に感じているため外出への不安を高く持っていると考えられる。

また、自身の判断や行動が正しいのかの判断の拠り所として他者の行動や意見をあてにする傾向のある人は、外出不安が高いことが明らかになった。コロナ禍ではSNS上に自身が外出した先の写真や動画を載せることは、周囲に対して自分は自粛していないことを宣言し、感染防止に努めていないとして白い目で見られることに繋がるので、たとえ外出や旅行に行っても、それをSNSに投稿することはしない人が多くなったと考えられる。そのような状況下では周囲の人が外出しているのかしていないのかを判別することが難しくなり、自身が外出することに対する判断の拠り所がなくなってしまうことから、メディアでの自粛の呼びかけや感染拡大状況を判断の拠り所として、外出に対する不安を高めていると考えられる。

それから、部活・サークル不安から外出回数には正の影響が見られ、部活・サークルの再開の見通しが見えないことや、コロナ禍以前と同じように活動ができるようになることに不安を感じている人ほど外出回数が多くなっているのは次のことが考えられる。部活・サークル不安の高い人は所属する集団に対する同一性が高く、大学生活の中でも部活・サークル活動に力を注いできた。特にコロナ禍以前の夏季休業期間中は、部活やサークルでは宿泊や大会などで所属集団と普段の大学生活中よりも長い時間共に過ごし集団成員間の仲や集団全体での親睦を深める期間であったと考えら

れる。しかしコロナ禍ではそのような活動や交流はできず、本来部活動やサークル活動に充てる時間が空白となった。その時間は、これまで部活やサークルで補われていた集団内での親睦を深めたり、関係性の維持のための外出に繋がっていると考えられる。部活・サークル不安はコロナ意識から正の影響を受けており、感染拡大状況や、感染リスクを身近に感じながらも成員間の関係性の維持や親睦を深めようとした結果、外出行動に繋がり、同時にリスクを感じているからこそ罪悪感も感じていると考える。以上のことより仮説3は一部支持されたといえる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、コロナ禍において、若者の中には不要不急と言われるような外出をするグループと、外出に対して何かしら抵抗があるため、外出を控えているグループにおいてどのような違いがあるのかを明らかにするために、新型コロナウイルスに対する意識と不安、文化的自己観、同調志向が外出時に感じる罪悪感と外出回数にどのような影響を与えるか検討してきた。その結果、以下のことが明らかになった

他者との関係性を重要視し、既存の関係性が崩れることを避けようとする傾向の人は、コロナウイルスに対して日常的に感染予防策を実施し、感染や重症化することについて身近に感じたり、関係性の崩壊に繋がる事態であると認識しているため、感染することへの不安や、周りの人が外出しているか確かな情報が分からない中での外出には不安を感じる事が示唆された。

また、日常生活で他者と関わる時間が減ることについても不安を感じており、他者とのコミュニケーションが取れない中での外出行動は、コロナウイルスに感染する不安というよりも、「周りの人がどう思っているのか分からない」ことや、「他の人が自粛する中で自分だけが遊びに出ていることで他者から白い目で見られないか」という他者評価を気にして罪悪感を喚起しているのではないかと考えられる。

中谷内・尾崎・柴田・横井 (2021) も新型コロナ対策と行われる手洗い行動は自他への感染防止よりも他者への同調が主な動機であると主張しており、コロナに感染すること自体ではなく、他者との関りが不安や罪悪感、行動に影響を与えているのではないかと考えられる。一方で、他者との関係性よりも自身で定めた規範やルールを大切に行動を決定する傾向の人は、その人自身のもつコロナへの態度や感染防止意識の高さが不安の高さに繋がっており、喚起される罪悪感も自身の不安の大きさに影響を受けることが示唆された。部活動やサークル活動に従事してきた人は、今まで部活動やサークル活動に充てていた時間が空白になり、

その時間の穴埋めや、部活動やサークル活動が担ってきた集団とのつながりや成員同士の関係性を保つため、不安や罪悪感を抱えながらも外出を行っていることが示唆された。

次に、本研究の今後の課題としては以下の点が考えられる。

まず、学年ごとのデータ数に偏りがあり比較困難なことから、学年による違いについての検討は十分にできなかった点である。先行研究では大学生活不安に関して、大学生活へ馴染んでいくことから、学年が上がるにつれて不安が小さくなっていくこと(藤井, 1998)が示されており、コロナ禍になってから入学した大学1・2年生と、コロナ禍以前の大学生活を経験している3・4年生とでは感じている不安の程度の違いを検討する必要はあったと考える。

また、罪悪感を測定方法にも課題があった。調査協力者には罪悪感の程度を数値で回答してもらったが、罪悪感が高い人と低い人が具体的にどのような感情を抱いているのかまでは本研究では明らかにできなかった。加えて罪悪感の矛先が特定の集団に向かっているのか、それとも自分の周囲の人達や、広く社会に対して矛先が向いているのかが本研究では十分明らかにできなかった。

今回の調査で外出先も尋ねていたが、調査時期が大学の夏季休業期間ということもあり、帰省を外出に含めていたり、帰省先からの外出を回答した人もいた。共に生活する人がいる場合、自身が感染するリスクだけでなく、同居人が感染した際には自身も感染するリスクが大きくなるため、一人暮らしの学生と、家族と住んでいる学生では、コロナに対する態度や自身が感染者や濃厚接触者になることへの考えに違いがあると考えられる。そのため居住形態の違いによる外出に伴う罪悪感の違いを検討することも必要だと考える。

他に、本研究では「部活・サークル不安」が高いほど罪悪感が多くなるという結果になり、部活やサークル従事者とそうでない人の中には考え方の違いがあることが推測され、その差を集団に対する同一性と考えたが、集団アイデンティティの違いが罪悪感や外出回数に本当に影響しているのか、影響していた場合にはどのように影響しているのか、こういった点についても検討する必要があると考えられる。

注) 本論文は、第2著者の指導により第1著者が令和3年度卒業論文として提出されたものを加筆修正したものである。

引用文献

Asch, S.E. (1955). "Opinions and social pressure." *Scientific*

American, 193, 31-35

有光興記 (2001). 『罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係』, 性格心理学研究, 第9巻, 第2号, 71-86

土居健郎 (1969). 『「甘え」の構造』, 弘文堂

Deutsch, M. & Gerard, H. B. (1995). "A study of normative and informational social influence upon individual judgment." *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 629-639.

Do Our Bit 学生プロジェクト, 原麻里子, 太田悠希子, 田口美奈, 高橋里奈, 国分安奈, 柳ジェイソン, 兵頭 荘亮, 藤橋明日香, 監修: 松下智彦 (2020). 『強制か自粛か? COVID-19 における日本人大学生の意識調査結果』, *Journal of International Health*, Vol.35, No.2
藤井義久 (1998). 『大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討』, *The Japanese Journal of Psychology*, Vol.68, No.6, 441-448

藤井義久 (2021). 『新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす心理的影響—COVID-19 感染拡大不安尺度の開発に向けた予備的検討—』, 岩手大学教育学部 附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要, 第1巻, 195-204

藤吉貴子・田中奈緒子 (2006). 『青年と成人における共感性と罪悪感の差異』, *Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies. Showa Women's University*, 2006, Vol.9, 99-105

一言英文・松見敦子 (2004). 『文化と文化的自己観』, 関西学院大学リポジトリ, 人文論究, 第54巻, 55-70

浜口恵俊 (1982). 『間人主義の社会日本』, 東洋経済新報社

北山 忍 (1998). 『自己と感情 文化心理学による問いかけ』, 共立出版

南 博 (1983). 『日本的自我』, 岩波書店

Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). "Culture and the self—Implications for cognition, emotion, and motivation." *Psychological Review*, 98, 224-253

Markus, H.R., & Wurf, E. (1987). The dynamic self concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337

Mascarenhas, A. J. O. & Higby, M.A. (1993). "Peer, parent, and media influences in teen apparel shopping." *Journal of the Academy of Marketing Science*, 21, 53-58

文部科学省 (2020). 新型コロナウイルスの影響を受けた学生への支援状況に等に関する調査

内閣官房 (2021). 『若者コロナ対策に関する意識調査』

中谷内一也・尾崎拓・柴田侑秀・横井良典 (2021). 『新型コロナウイルス拡大期における手荒い行動の規定因』, 心理学研究 2021年 第92巻 第5号 pp.327-331

- 白石彩乃・樋口匡貴・蔵永 瞳 (2012).『大学生の日常生活における集合罪悪感と集団同一性の関連』, 広島大学心理学研究, 第 12 号
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1995).「相互独立的—相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成」, 奈良大学紀要, 第 24 号, 157-173
- 高田利武 (1999).『日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討—』, 教育心理学研究, 47, 480-489
- 高田利武 (2011).『新版 他者と比べる自分 社会内比較の心理学』, サイエンス社
- 高田利武 (2012).『日本文化での人格形成—相互独立的・相互協調性の発達の検討』, ナカニシヤ出版
- Tangney,J.P. , Wagner,P.E., & Gramzow,R. (1992). “Proneness to shame,proneness to guilt, and psychopathology.” ,*Journal of Abnormal Psychology*, 103, 469-478.
- 横田正夫 (1999).『罪悪感』 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編), 心理学辞典 有斐閣, p.287
- 横田晋太・中西大輔 (2010).『同調志向尺度の作成—規範的影響と情報の影響』, 広島修大論集, 第 51 卷, 第 2 号, 23-36